「妙好人」の本質的解明

五十嵐 明 寶

近來頃に「妙好人」に對する考究が頻繁になされて來て來てが、この研究の方向としては、(一)『妙好人傳』の成立に關する研究、(二)江戸時代における「妙好人」出現に關する社會學的研究、(三)「妙好人」の本質的または人間學的研究、(四)「妙好人」の文化形成に關する研究等に要約することが出來、各方面から本格的に「妙好人」が扱われだして來て來ている。このうち(三)の妙好人の本質的又は人間學的研究に關しては、神子上教授が眞宗の人間像として妙好人を探り上げておられ、また森龍吉教授は妙好人の本質を親鸞の超越思想の後至形態として示しておられる。

けれども「妙好人」の研究は未だ傍系の問題として取扱われている傾向が強く、それは、この研究の端緒となつてゐる『妙好人傳』が江戸時代後期の所産であり、この時代の佛教學研究が未だ究明し盡されていないということと、妙好人が淨土教就中眞宗の念佛者を指し示す爲に、佛敎の根本理念に遡つて妙好人の本質を論じられることが殆んどない爲であ

り、従つて妙好人の性格も明確になつておらず、その佛敎學的意義も明らかではない。そこで妙好人の根本的性格とその出生に關する本質的條件について考察する必要があると考へるのであるが、その爲には、

第一に「妙好人」出生の宗教的・思想的背景を明らかにすること。

第二に佛敎における、特に淨土敎における「妙好人」の位置と意義を明白にすること。

第三に「妙好人」の生活態度について宗教學的に、また倫理學的に本質的解明を與え、大乘佛敎における菩薩の實踐道との關係も明らかにすること。

等の必要があると考へる。

そこでまず第一の問題である「妙好人」出生に關する宗教的・思想的背景についてであるが、『妙好人傳』に見られる妙好人の本質形成の基本は、淨土往生の信心の確定(例へば『妙好人傳』越中佐治兵衛の條に「此れ迄夢のように存じたる極樂淨

土が確かに思えるは如何なる御慈悲ぞ」とあるように」と、それを通しての現實生活の安堵（例えば『庄松ありのまゝの記』讀岐庄松の「どこに居ても寝ている處が、極樂の次の間じや〜」とあるように）によるのであり、その結果、過去の宿業をも諦認して三世に安住している姿が認められる。この信は善導・法然・親鸞と繼承され來つた淨土教の宗教體系に全く依存しているものであり、善導の『觀經疏』（散善義）における「念佛者即妙好人」に源を發して、法然の『選擇集』（讀歎念佛章）における引用、親鸞の『教行信證』（信卷末）『淨土文類聚鈔』『愚禿鈔』『入出二門偈』『末燈鈔』等の各所における引用と、そこにおける「信心の利益」「現生十種益」「現生正定聚」「妙好人」と連關する宗教體系の發揮に依っているのである。特に親鸞における宗教體系の根底には本願に依據した「横超の全剛心」即ち淨土往生の淨信 prasada⁵⁶があり、それが「證大涅槃」mahāparinirvāna に直結していることが表明されており、妙好人もこの信によって出生したものであるが、その信が「證大涅槃」を基底とするという意味から佛教の根本真理に立脚しているといえるのである。

然し妙好人における信は基本的には大乘佛教の根本理念に則っているといえるけれども、細部の形體においては聖道における信と大きな相違がみられる。妙好人の信と聖道五十二位における十信位の信とを比較勘考するに、妙好人の信は聞

を以てその内容とするのに對し、聖道における信は發菩提心であり、前者は行信不離の關係にあつて「行即信」と規定することができるのに對し、後者は行中の一部であり「信を行ずる」（大乘起信論）ものであるということが出来る。そしてこれらの差別の根本的な論據として、聖道・淨土の二門における衆生相の把握に大きな相違のあることが知られるのである。

また親鸞所明の、「金剛心・清淨心」が「證大涅槃」に直結するという點について、存覺の『六要鈔』第三には、往生の益を得るといふべきであるのにどうして證大涅槃を超越するというのであるかとの問が發せられており、これに對して

往生初益、涅槃終益。亦依^レ生即無生之義。往生即是涅槃極理。是故從^レ勝云^レ證涅槃、是依^レ必至滅度意^ニ耳。

と答えているが、往生即涅槃と示して、淨土教における往生淨土が佛教の根本真理と合致するものであることを表明している。往生淨土において凡愚の執心性を如來の一心に集め、更に名號及び淨土の無生性において、凡愚のものが涅槃・法性・一如等に廻入させられる點、佛教の根幹に立脚しつつ、淨土教としての眞實性を發揮しているということが出来るし、これが妙好人の信を形成し、その安心の本質を構成しているといえるのである。

第二の佛教における、特に淨土教における「妙好人」の位

置と意義についてであるが、それを示すものとして妙好人が現生正定聚に住している（例えば、逆説的ではあるが、『大正新妙好人傳』早野傳次郎の條に「此の身をばどこをおさえて正定聚、彌陀に向えば嬉しはづかし」とあるように）ということがある。親鸞の宗教體系において示されてある信と現生正定聚の直結は、大乘佛教における信の構造、特に『華嚴經』における「一念信」によつて速かに無上道を證すという思想や、『涅槃經』等に見られる「信心即佛性」の思想とも連關するものであり、信益同時の思想が表明されている。しかしこれも淨土教で扱えられる衆生の愚悪性に相應して發揮されたものというべきであり、現生正定聚の成立の根據も『大無量壽經』の本願の中に求められている。

この現生正定聚に連關する問題として、『教行信證』信卷末や『末燈鈔』に示された「便同彌勒」の思想がある。信卷においては眞佛弟子釋に續いて便同彌勒釋がなされ、これは前の眞佛弟子釋を助顯したものと見えるし、「眞佛弟子」を大乘佛教全體の中に位置づけたものともいえよう。また『愚禿鈔』には他力金剛心と自力金剛心を並べて示し、他力金剛心の一念に菩薩修道位における等覺位が約束されることを明しており、ここに妙好人の本質が示されているといえよう。

この「便同彌勒」について『末燈鈔』第三通には

「大無量壽經」には攝取不捨の利益にさだまるものを正定聚とな

「妙好人」の本質的解明（五十嵐）

づけ、「無量壽如來會」には等正覺とときたまへたり。その名こそかわりたれども、正定聚・等正覺はひとつころ、ひとつくらゐなり。

と示し、聖者と凡夫の相違はあるが、「佛になりたまふべき」ことに約して同じ位に住することを明している。

上の如く親鸞の便同彌勒思想は主に『大無量壽經』『無量壽如來會』に根據を求めているが、信卷末には不退轉について「法華經、謂彌勒菩薩所得報土也。」と示す王日休の文を引用しており、中國佛教における彌勒思想や、日本における平安中期からの彌勒淨土思想に影響され、それらに見られる「彌勒等覺位」を參考にして、現生正定聚の宗教體系を開明したものと見ることができよう。

このように念佛行者は正定聚に會入して等覺位に住することが明されてあるが、妙好人も不退轉位に住していることで大乘佛教における位置づけもされ、また意義も有していると考えられる。

この不退について迦才の『淨土論』や、窺基の『西方要決』には位不退・行不退・念不退及び處不退の四不退を示しているが、この處不退が淨土教における不退の基本を示すものであり、法然における「不退の淨土」や、「安樂不退の國」の表現は、この處不退に根據して云われている。これに對し、親鸞はこの不退を現生所得のものとしているが、『六要鈔』

二五五

第二には

非三不退 非處不退 只是信心不退義也。

とその意を明し、この信心不退の義について攝取不捨及び「横超斷四流」という意味を興えている。また淨土教通途に云われる處不退と、親鸞における信不退について、同じく『六要鈔』第三には、これを會通して

入正定聚益者第十一願所說益也。本是雖レ説處不退位、現生之中且得其益、是則如來攝取益故、故龍樹尊『十住婆沙』判云「即時入必定」也。

と示されてあるが、妙好人の得られる不退が淨土教における處不退を根底としつつ、如來の大信によって現生に信心不退に住することを示しているのである。

第三の問題は妙好人の生活規範に對する宗教學的乃至は倫理學的な解明である。『妙好人傳』における妙好人は極めて諦定的であり自然法爾的であり、苦惱の生活を歡休の生活に変え、感恩と慈愛の心に豊んでいるが、これらの本質的な根據として示されてあるものに『教行信證』信卷における「現生十種益」があり、それが正定聚不退に住するものに自然に施與されて、妙好人の生活態度の規範ともなっている。その中特に生活規範の本質を具體的に示すものとして、第二至徳具足益・第三轉惡成善益・第七心多歡喜益・第八知恩報徳益・第九常行大悲益を擧げ得るし、妙好人の性格もこの益を

そのまま實踐している人といふことができる。更にこのうち倫理的な實踐性を顯著に含むものとして第八と第九の益があり、知恩報徳益は『妙好人傳』では佛恩・師恩・父母恩・國恩に對する報謝行となり、常行大悲益は生きとし生けるものへの憐愍となり、自信教人信の實踐となつて示されているが、これは聖道の菩薩における自利利他の實踐性と等同の規範を有していること知られ、自ら「計らい」なきまま、大乘菩薩道の實踐者といふことができる。

また次に妙好人は、現生に涅槃を證超することに決定しており、現實に如來に攝取せられてゐる爲に、生死流轉の繫縛から離脱しているのであるが、自覺的には一毫未斷の凡夫として照顧され、正定聚に住していることは自覺されないから古來この現生不退の益は念佛者に對する密益と解されている。けれども妙好人はこの正定聚に住することによって、生死流轉の苦惱を離れつつ生きていくことが、『妙好人傳』に窺えるのであり、それは『末燈鈔』に

もとは無明の酒にゑひて、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒のみ。このみめしあふてさふらひつるに、佛のちかひをきゝはじめしより無明のゑひもやうくすこしずゝさめ、三毒をもすこしずゝこのますして阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふてさふらふぞかし。

と示してあるように、宿業を果しつつ、またそれを歡びつつ

生活している者であり、煩惱熾盛の凡夫が如來圓備の徳に融合せしめられ、それに慈育されながら生きていくといえるのである。

そしてこれら妙好人の、自然法爾的な生活の本質は、妙好人の無我性にあるというるが、これは衆生のもつ深重な執心性が如來の慈悲に集注される爲であり、その結果、本願の信が衆生のものとなるのであるが、そこに妙好人の宗教的生命と倫理的實踐の根幹があると知られるのである。

- 1 『龍谷大學論集』三七七號一頁及び『眞宗學』二九・三〇號八一頁
- 2 『近世佛教』第三號一頁「聖」たちと「妙好人」
- 3 この信は梵文『無量壽經』では prasāda に相當し、これは大乘佛教では、mahāparinirvāṇa に根據する信心として、知られる。
- 4 眞宗聖教全書(二)三〇二頁
- 5 同 右 (二)六六一頁
- 6 迦才の『淨土論』は大正藏四七卷八六頁C、窺基の『西方要決』は同四七卷一〇七頁ab
- 7 眞宗聖教全書(二)四〇頁
- 8 " (二)二九八頁
- 9 " (二)六九〇頁

「妙好人」の本質的解明(五十嵐)

新刊紹介(九)

大原性實「眞宗教學の傳統と已證」

- 第一章 親鸞教學の景觀
- 第二章 觀無量壽經と淨土論
- 第三章 親鸞釋義における傳統と已證
- 第四章 親鸞教學における證果論の傳統と已證
- 第五章 慈信房善鸞の立場と思想
- 第六章 親鸞書簡をめぐる諸問題
- 第七章 親鸞書簡に現われた傳統と已證
- 第八章 淨土觀における傳統
- 第九章 淨土觀における已證
- 第十章 親鸞文書における地獄
- 第十一章 邊地墮獄の異義と念佛無間説
- 第十二章 觀無量壽經における觀佛と念佛

A5 本文三三〇頁 永田文昌堂刊
 (眞宗教學史研究五) 定價一、五〇〇圓